語林類葉

めも 十七

三

ホ 2
502
17

502
17

語林類葉巻之十七

清水濱臣輯

めの部

一言

め　女子ノ名ノ下ニツケイフ通称也

後撰雑一　志賀のからさきにてはらへしける人のしもつ
かへにみるといふ侍りけるを　黒主
何せんにへたのみるめをおもひけんおきつたまもをかつくみにして
〇此号女名ノミルナル女ニ海松ニヨセテヨメリ　〇古今作者自女　同人と大和物
信ー
にしるしあり　〇大安寺収蔵帳　〇続紀

ヨメヾ
シロメ

め

盛衰記十八云ハ龍王ノヽ氏申侍ル也○同 同
房八外海ノ小龍メラ四大海水ノ八大龍王ニ
御付テナク成ヘシトテ嗔リケル○同 同 梶取
メラヲスカシ貢セタリ○同廿九ソノ信救メ
イカニモシテ打殺セヨ○

某眼

万一 [illegible] 山 [illegible] 同にみえたる

タヽラメ
メツヽラ
ヒカメ
ウチツケメ
ツハメ
ヨコメ

○竹取 [illegible]○和名 職 タヽラメ
○字鏡 盱 メツヽラカニス ○栄花 花山 [illegible]
[illegible]○今昔廿六 十八 若シ僻目ニヤト思
ヒテ○源 浮舟 [illegible]○同
同 [illegible]
[illegible]○浜松 三 [illegible]
[illegible]○同 四 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]○同 三 [illegible]
[illegible]○増鏡十 [illegible]

はるまもらつけのなくし

夫木卅四 詣寺見恋 僧恵法師

とふみはつかてあふいまゝみしきついつくいかまとこ河のちとき

○

キリヽスメ

ヤマカラメ

コカラメ

四十カラメ

ハタオリメ

ツハクラメ

カモメ

某め 鳥名

保憲女集

きりくはめら桐てこにおき侍らる君まへのもれえるともはくて

夫木廿七 小陵鳥 寂蓮

あ縁してをくらぬかたはむかし見の世ふ人をたにある世なりけり

同同 四十唐 寂蓮

桐はらきゝはナかしめそあたらしなりあまはりせなむしのまみるを

○ 拾遺物名 やまかつらめ きけゝ

河内メ

初瀬メ

かつてメ

東メ

○

某女（ナニメ）

万代恋一 [illegible]攝政太政大臣

思わひはうちしをれぬと河内女のてそめの糸のよるにいりてねん

同雑三 初瀬女

頼政集

つゆしめや新枕にも夜雨しはるゝしめの夜をまつ

同

東女のあそ笑てきけは御跡やあそめかさしに千鳥なくらし

○

二言

兎し飯

拾遺雑上 藤原後生

むかしをそこしきつめの世のなかに有のまゝしおめしにいりて給さ

もし書に内林寺に云々　験小記

石に飯とらせし

○

めは　着

しめはへ下　みこに出しつるあやの錦ぞ。

めぢ

和泉式部集

あらしふくめぢにはなきうの立ぬれば人やきぬらむ内とさにまは

続古雑下　俊頼朝臣

さへられ[illegible]ものまにまかれてけるの草茎めぢぞなかる

散木

夫木廿一

めかま

詞秋　道命法師

ちる年をまつへき花のあらましにまたぞうつろふきくのめかまとも　世見

○

三言

めくむ

林葉一　芽萌（メクム）　逢推友同花

きさらぎはきさらぎ山人のめぐまん枝をおるべくもなし

○

めぐみ 菜

海人藻芥云毎日三度の供御ハ清めて七種清汁（メグリ ハ今菜）

二種く御飯ハもりもり強飯と申しなり。（ヲマハリト云ニ同シ）○

めざし

字鏡 髫 小児目佐志 又 鬟 目佐志 ○狭衣三上ノ十一

めさしなる清けなるしとせちにうきやうつくしき（こ女の）

○志のび給ひて帰りてしいめさしにおひしたるの毛なかく

ふきなるやうに○催馬楽朝倉裏書哥 安佐久良也。

乎女能美那止仁。安比支世當多万乃女佐之仁。

安比支安比仁計利。○同竹河 ニ段 波名曽乃尓

和礼乎波々名天也。和礼乎波々奈天也女佐之

太久戸天

夫木廿四 此河のもしみのめならなる花園に家ととまりてめさしなくして

袖中二 きめくちめなつさの濱に見つるかふあはれのめさしのかなしけれ 或物語云

○

めぞめ

源 詠出 花つくるのおほひ染めのめかしき めぞめも○ 河

花机霞繡文紗目深也○巴抄に目深きをいふなり
めし織物なれは紗なし

めづけ

続詞戯咲　うき世のおもおもしきものかたりめつけなるかをめもあはれなるはなしきゝ給へてまつにはまかへをさかしに　弁乳母

いはしやうまのめつけいかばかりふつゝかにかくはなん

○庭訓

めぬき　刀ノ目貫

拾遺神楽
しろかねのめぬきのたちをさげはきてならの都をねるはたがこぞ

○

めゆひ　目結

嚴嶋詣記　さしていろいろにめゆひいりたるやうなるはかまそ見えて

散木雑上
山家下
君をいかにこまかにゆひてしげめゆひたちもはなれずならひつゝみん

○

鎧 太刀 弓 矢 釼 甲

四言

名物

産衣（ウブキヌ）ノ鎧 盛衰記十六 十四 ○骨食（ホチリヒ）ノ太刀 同同 ○雷
上動ノ弓 同同 ○水破兵破ノ矢 同同 ○獅子王
ノ釼 同同 十六 ○唐皮ノ鎧 同四十 十一 ノ ○小烏ノ太刀
同同 同同 ○八龍ノ甲（カブト） 同四十二 十二 ○

えいはく 面目ノ音便

○源 ちくきう ○同 真木 柱
○末花 花山 亦七 詩めいはくともめてゝくて○

えうつて 隆信集下
かぎりしさへ人の世花めかうつりはつるをあやなき

えかくし 星根ノーーーー也

今物語 ちる花のはしをとるをもくろし瞻西上人の
家にふきけるとみて雑色を使めてとりも
てとくえかくしにあけといたせて

えしあけ

○大和物語 きぬうちとちもきよけなりけれはしおもれ
かつらをしろくめしわけなる○後撰 恋下 延喜
御時御息所の中にめしわけられて○続
後撰 上東門院をとろしめて召されてえこ○

めしつかひ 下文
つかひの部

めしうと 河海 召人○妾也
源 真木柱 御めしうとめきてつかうまつりなれたるとく
ぬきみ中将のおもとなと○大和物語 かとのめしうと
めきてありける○栄花 たまくの ちた かほ人めしうとめ

内侍れをとけのかはうえ年内にまくかさきさんの北方めて
○遊士日記 小野宮の御めしうと○宇治拾遺 とりけ
かはしの御めしうとにてありつるめさきかつらせせめるなとい
書紀 有客人(メシウト)生男女四人○

めしつき

竹取 さらに客人二人めしつきさらして○栄花 初花 八才
○源 宿木 めしつきとかりかれとのあかいみなとりつし
きにてはいめしくかんなるに○ 花 李部王記 天暦二
年十一月廿二日丁卯夜請右兵相坊門家限公

中女 中臈 召継以下銭二万○同 西宮抄院宮雑
事中御随身勤夜行召継奏之云々今案親王家
又有召継式部卿宣明親王嫁娶之時召継以下
銭二万と録にめしつぎしも上記 李部王 とこそ
えし○

めしつかひ 今召使スルヿヲ目ヲ子ブルト云ニ同シ
是家抄にかゝの世にて君の御膳をちおもらし侍れん後
いかにぬれもあんぬ○同 同 法皇の御閑膳の時ありて
○

めしやき 目明
阿佛轉寝 めしやき山も何もやうつ侍しれり○

メンケタ
面形
今昔廿八 廿五 舞人ハ多好茂也面形ヲ取去テハ
人モ見知ト思ケレハ面形ヲ為乍ヲ○

めんく 面々
中務内侍日記 御前のへやすしにめんくに

めかしく

源 幻 今一きは情ある情しもめかしくあらく ○同 同

○同 宿木 わかきちにめかしうものはしく ○同

めかしうねぢれて。

なまめき給 天紋

みなまめき給 美紋

めでたき給

散木 見佛聞法楽

めでたき給ひしりしあはれの心をしのびつゝさみのうき世もかなし

めくしく

べらく ちらく めらく ほらく

竹取上 四十一ウ

めとかへ 今云めかくしといふなり

今物語 昔信用とまめなし 用をとゞきて いかなしりとゞめいはれさいかえ

目とかへし。

五言

目かしこく

盛衰記廿二 目カシコク見トカメテ○

めしあつけ　メシヨセラレ其序ニアツカリシ也

伊勢物語 六九段 むかしおとこの女御のいとこの花は
かうにめしあつけられたりけるに○

めし
つかひッ部

めしつかひ

大和物語 北方うせ給ひて後これかれあるなかに人を
めしつかひ給ひけるか○同 つかさのこなたに
ある様のさうといひける人をめしつかひけるみもめしつかひ
けれは○源末つむ 大輔の命婦とていといたうしのめる

ちか人にてさふらふを君もめしつかひなとしたまふ○大鏡
三又きゝめひける女房とめしつかひけるつかひたまひけるはしたに
かのつかうまつれるへつきたる女君

めしあまし　重言ナルヤウシ
源 柏木 わ侍大臣めしあまさしとて○河 朧

六言

めもえらせぬは　えしもみゆまく
栄花 花山 六三

七言

えきれもあつね
今昔廿六 廿四 月差スモ不知晴キニ○

みえてそ川なつる
大和物語 覚命婦 かへても川なつうてわか兇て
ゆらりの○縣居雑録

月卧とふゆつる

愚管抄六 んととき月卧 と見えてつまるか○源 浮舟
かほえれきと清閑あて けたて文と見まへは○讃
彼たらく人つらは閑もえたてぬ○同 円
なやらあらん○同 何ゆも閑らた かくみんもえくて お月見て○同
第のるに閑のゆゆちて
玉雑一 和泉式部
つもりくと物えにを根表の日は兇にをつ物は雲くれし
円雑三 同
あめりくあなしき物ぶ不恙はかぬ御しく花も霜も兇れし 堂説は
○

八言

目口ちゞみりて　キモヲツブスサセ也

今昔十九 十八 女房達奇異ニ目ハダカリテ思エルヿ限ナシ○同廿八 十二 僧共此レヲ見テ目口（ハダカリ）ロテ皆立去ニケリ○同廿八 卅 奇異ク目口開テ居タリ○源 少女 あけまきしたへる人々のもあわしけ消めなほきにあらぬ○落窪三 十七オ 目もはちゝなりぬ

目の上にさし

今昔廿六 十八 郎等共手毎ニ取テ目ノ上ニ○捧ツヽ持来テ○

兎もあやにあやし

栄花 花山 六一

目をうち叩（タヽキ）て

今昔廿七 五 可死氣ナル縛リ被付テ目ヲ打叩テ有リ

十一言

もろこしぐさのかりきぬ

大和八 六十 馬のはなむけにもろこしぐさのかりきぬら

きぬさかりしてやりける○

十三言

めにちかき入なるとてなら 摩

らう源大納言物語 藤井 声てみてぬめのおりの入ころ

とてはなかり○ 涙ヲマキラスサマナリ

めとも河のはさしいつきかり

源 東屋 さまかはりたるきはの人のてかくいふかきり

いみしきあつめてはかなくきこえつつかとも何かにさ

しいつもありみて 調度ノ多キヲ云

十三
十七
十二
十に
廿二

もの部

二言

もぎ　裳着

落くぼに 卅八 むめ君十三にて御もぎありぬ○源

葵　○小右記長保二年十一月 云々 来七

日伊勢斎王着裳 云々 年十七　○栄花かゞやく藤つぼ おほと

のゝ姫君十二にならせ給へば今年のうちに御もぎ

ありて○後拾遺 人のむすめさゝやかなるこなに裳きせ

かしはせさせたる儀をもはらし侍りけるにかきつけゝるて きこ

○宇津保 あて宮十二にてきさしにもきたまふ○源 梅枝

御もきのまおほしいてゝ 明石中宮 十二単 ○同 蛍宮 えりは
きのこゝろも人よりまさりけるにしなしたまへる 明石
姫君ヲ云此ツハキ四ケ所ハカミキトアリ ○同 若菜上二丁 御もき 女三宮 十三四トアリ
○同 宿木 十四になり給ふ年御もきなりぬれん 女二宮
○同 松風 ひめけれはけれはまつもへつきまきる
もさんかうのこと 御モキ ○同 行幸

もじ

蓬生一上五 ふるいあはきもじとしかるやうやせはこゝ
是ハ仁字ナリ ○源氏宴 ゆかしくへあるもしらぬさらまし
ヘヲイヘリ

ハヤきのまきのまきの詞のもとへ コレハトモシトイヘリ ○金葉雑上
かゝる御侍れる人のまへにかゝりけれはさらに人かつきてつ
ゝしの方へ渡りけれんさしのかとゝきて男のもとより侍ける
侍しきくらしとやかくりかはきこしける 内大臣家小大進
身のうさをとふへきせきとつくるかしの道にさそはれぬ
○金葉ニイヘル モジハモシノ関ノ地名ヲイヒ
カケシニテ男ノ方ヨリツクリシヘユクトハ思
ヒ上ルヘシトイヒヤリシ一詞ニセキト、メラ
レテ行カヌヨシヲヨメルナリ
○枕冊子 十七段 ちかく侍るからうたもしとあはせたるや ○同
四十四段 もろしかんまてさかにゆかしく侍りしてみしくよろ
ん文字のかたもさなかゝる様にかんとて書つき ○同 廿八段

イモカサ
アカモアサ
アカカサ
ミツモ
アセモ

何とやらこゝのしらぬ何見ていふはなかし○同 四十四段 浦し
ていみしくあるとしめいふ常もされたる様てかんとて

三言

もりさ

賀茂保憲女集 あめのしたのはつかさのふみの清付にそゑかきやふるの
かけりて 下略 又もこゝのさかりの間をさくへやられ○第
四 花山 花 さゝしいは 花山院 天延二年 との井ふりかさくふもとのいて
きてしゝ○同 もりの古門く さしもいものさといふの路
をぬつしそてつふしのくぬいふうきとしたりやとりかと云

まちあれいに○同 同 かくてもりさ京にきかれいは○
同 峯月 かくいふはたとしたしい あかもりさとふの
いてきて上中下をもほふしのいまろにも見のもひ
やまねんのさのをひやもさくりて内東よの中えをかんの
よのれを皆中宿もの人きかもしそもみてかを清せふ
いふかそろしらいろにくまか隔しなさ宿○同 同 清うさかまし
させまへをとり カレハカセタルナイフ○同 そらの釜 四さらあかつさよ
ひもしてうらつきのすのけのなし八重不○同 きらいらいしと 路女房
その年すかさなつまりいて○同 まカ 布引 廿三 ゆ月をおうまう
ありさをいそてきて世の人やむれをゆすめるに云○

同 栄野 そのころもかさとりふるなかにて○同浦々別 二る
ゆめはいあかるさりそていとふかくみて○同 日 むかしはの
そわさみいおもていときありきのちはかれらいそきて
おいころこかきよりもとりはの○新頭抜 為川あつきときあめ
つきところにあとかれら限くあくりぬきくとれもの中
ゆかめの前くいてきちらとりかへし文あるもこともいふ也○東
鑑廿九文暦二年十月廿八日自去夜主上疱瘡
御不豫也此事洛陽流布諸人不免○同五十一弘
長三年正月九日左典厩自東御不例今日御疱
瘡出見○愚管抄六八条院く母三位殿とかいひし人

母のこのけもつまみて院中弟一の前あて 女院なり
春宮らもまかせておもいかちあるしんの同年 延保六年 の
ませ世にをかさしいふ病起りきりしと大事にとりひて
十二月十四日うせさせたまひにけり
をさな
如已 五九 ○
とあへ 元カ 同カ
安穏保 きてまて おもて おもろあさくこさえたまひて○

とちに　持荷

後撰雑二　ところ人あるに

秋はりの見をとちみてなりの山あつきはきをとりひりぬる

○

とちふ　持丈

拾玉四　卅七

あふさかの関のとちふる路やいつて持丈にさきし出るさん

丈不九同

○挾衣一　上十一古本

清輔集四位の後岸の仕にとどはされけれい

恋のとちふるとて　之之

あまのかるもにまつるかにとちふたまれをかへる

○

栞のもと

さもの紛さん　後鳥羽院の御代かいときき連歌の上手とい

稀のさらの乱に名付しとらるき連歌として界のをとみ

乱と名つけられ侍りき○つくを集め序　名くく雲のうえ

のとてあきし花のとよみなりふしきて被生てる○

かきのいい
くりのいい
なしのいい
花のいい

とくら　百日

栄花　花山　廿五　御いやとくらの乱く○続古賀　後京極院う

語まなひて八百日の秋をまちせかいける　一条院

○

とやし

文木六　後撰

うつる日ふの松虫にとやひせん物思ひちしの松みけて

とろや　とや　かしこやともに秋あて字之

業兄　載上花見

月ちらぬ花の日に松とあ月きらをとろやたる代とのけてたらん

同歌合

花ちれてうつるをみまに梓らとろやいろうましりける

同

うれしきにとろやのうかに梓ら君もうらむくちろまなる

拾雜春　順

花のくも散らしと思ひし梓らいまそうれしきやしつるを

堀後百明弓　常陸

露しくあのおしかぬうつきらをとやしつるうち梓かかれる

四言

語源は欲定の意あり侍してあんのまし侍ぬるに侍まて

もちかし

拾恋二　読人しらは　ちくん思ふは

うれ侍りさもとかしきん侍ぬもるん人は恋たのむなしき

後拾恋三　増基遠江訛りたちうを

ちうをととかしきえしまかなしもそいあひえぬともいしとか　又後拾の

堀後百　忠房

とかしとある侍るつめや思ふかんあとぬ身侍きれの侍らえに

千恋　平実重

人のくて思ふらいかにとかましつきも恋はいふうさくるを

○拾遠く千載同意遠江訛り端後同く同意之

十六三 前備
ちらにしてもときし合やしかし袖のかへくたちるへきなれ
後拾六四 好忠
あちきなし我男に酒さへあやまちしとたちしとちう枕を
○字類抄 一丁 さしみ 以モ上モにおもふ文をとくとまて出侍り
こ文をとつくりかなしけれとい こと ○鈍 モトカシキ 難太平記

をしなへて おのつ上句 下句之
大和物語 いそて思ひそいつに酒をまいる 世の人をしなへて
とかくつけまゐる○源 早蕨 をれきたる事をしてなをそく
つれていひつくりし○枕十 十七 をのうしさんのおもはえて
ゐをひまゐらせて○同 ほ 十三 おもものをしてをおはせられて見

うちいひたしにおほせらるるに○後撰秋中 暑のをとをい
ひ入て侍けれともまいらせちぬ○伊勢物語
○神楽歌
をしたち 本立○草木ノ根キハ之
源 蓬生 せんさいのをしてちたちもなしくされ○

をとつの 自然 香気
源 紅梅 をとつの匂へる香は袖にふれぬ花なれとやかさん
兼備集 もとかめのあるにあるを梅の花いてにほひのをとらぬかな

○

ちりひち

字鏡 ○屎くは ○和名 ○都土塵

ものうき 懶 ○物毎ノ憂コトニモイヘリ

公任集女御おほん返し
花ちるも雪ふるもいさや何ことも ものうきあきのはてそかなしき

曾丹集
山里いまもものさひしきに吹風のおとさへはてにものうき

詞花久
村山修理詞

もののけ 万代集四 藤原清輔朝臣
さても又かゝるためしのありけるよ身のうき事のものゝけそかし

○

ものから 物ニヨノ物カラ

万六廿
見渡せは近き物から岩隠れかゝやふ玉をとらすはやまし

拾遺集雑
稲風にさそはれつゝもやのとをすかんとすれはさそふものから

○源氏 夕霧
さもひさかたの人のこゝろかなしらにもあんな
あいなしとおほしてやみぬ ○同 ほけ給
あくなりたてさせ給ひ

に海のほとりにすみけるをや聞きせ給ひてもよ為るこそとめ

けむりも絶えや侍りけんこの所に人のうへの所しく

のこ侍るをたのみていつ侍りけん○

ものげし　モノイヒザマ之

新撰六帖　ものあつかひ　信実

ものげしき物思ふ人の袖にねぬる夜は世にある人のなげ

○つもり　九條　人のほとんどの人はいねんとするけしきに

ふて猶ゆかしく思ひまさる○源　末摘花　さへぎらひ所く物げ

しみてかたちもよる　紫式部と身にしみ名残多きひがき

もの惜しげ　ふるまひにさもさものいひさまなどのおぼつかなふ

ゆゑくし　○

ものあわち物裁

源　野分　ものあわちれたる袖ひきちぎりあへにあまりして

ものつき

昊憑（モノツキ）○御産又御不例ノ時物付ノ有源氏ニヨリマシトイヘルニ同シ物ノケヲ付ル心ナリ

盛衰記九新大納言父子共後寛康頼ホカ昊共トテ御物付ニ移リテ○続世継　法皇のものゝけにや

つきのものゝさせてねさせ給へる○紫日記

○禁秘抄

ものとし　物トに

狭衣二上 卅八 おもひ人やうやうとて○同二下 卅八 おもふさと

しあるとものとをせなへい○

ものぐ　物具○調度といふたぐひ

後拾雑二　年ひ侍けるむすめを男なとにもひはなれてもの

具なとも傳へ侍れはむすめに絶るなり○大和物語　絶えなかり

さいきしにおひて家もやけはちるものをしも病せりとて道を

て○續世四　あけていとあまたに經紋珠なと尊くいあり

もくうろ○

ものゝとうし　物張

拾玉四四十　左はいさ川に螢しかしとものゝうしもゝとかしまたうき流るる

○今昔廿四 廿七 尼已ハ故年相殿ノ物張ニテ十

年侍リシ○

ものゝあはれ

古今秋　秋はいかにしてあかつきもしを庭へし天の川原にはいなかのあはれ

全雑上　家の風吹ぬとものゝあはれもかうしのこのものゝはれもかうしてゝる

詞 雑上
あやなきかけをもみるかなあやめ草にほふやのつまやへのみえさむ

同恋下
うきのとや　秋篠月清

千恋二
こひわたらん　定家

うつもり　文盲 ○ 蚊虻

長明無名抄上 武人は基俊は俊頼をば蚊虻の人とて さらにへとも馳の道をもしらずあひなしとて見られい○

うちあち

中務内侍日記 むかしのさしぬきもうちあちのつ川波

をいきして○

うつて　百傳

万葉二　百傳　ももつたふ　ことの松 辞もとらしあやめ草

清輔集
うつての波路にのりや恋あらん世々の名にこそ住はしも

万代恋一　後鳥羽院
百川ての八十の像さへろあひは恋にしる実のうへなつせて

夫木六　権僧正公朝
むら雨にいろあほちんとつての山路の池の山水のとも

師光集
萬代の数あいあらしとつてのやまの橋路の雨さえもとも

○

とふさし
夫木廿六 為家
○ ちゝちゝやとゝとろとゝのかけるも似さ世の中にとひふるゝ

とふさひ 諧示
志のゝ秋止 とふさひ似ゝ侍らい ○源

五言

ましくさ里 文字鎖
拾遺負外 十八 いろもとそしつきり 云云

月詣雑下 賀茂重保
とさみをのみをもしなきりはる人やいはもわらりやゐてさんみん
○續世継 花のあはし なきりきん乃風しいふとの秋に志
らぬにて ○袋草子連哥ハ本末只任意詠之雖然
至錬連哥発句ハ専不可詠末句又如然之時任
口早速ニ不可発 ○夫木九 蝉 建保二年六月文
字鎖廿首 ○著聞五弘徽殿女御家歌合に花かゝし
志ゆ面みしうゑる文まらさろとなれ句のふたとゑ 云々 折
句の方によ面せしもしたる ○夫木十八 雪 文字鎖廿首
仲正集

とこなつに
続詞花

とみかし　とつてもなく
志のぶ袖下　とのかくしたるはつらふなしれずもと○源
総角　とのかくしはそへしよ○

とのかく
中務内侍日記　くるまよせ遊女の舟ども前へ出むかひ
かよへれてはるるなかし○

とのけれき　物気無
源少女　わらはさえとのけれきほうら見過ぬるて○
夕霧　同　とのかくのほとりてわれとむかしもけれ
トヨ廿十三　同
うつしけい○狭衣一ノ五十　いとこのけれてけしきはれると○

とのこうと
榊葉日記　さしあまりれきとのとかくとし○

とのさえ

菜苑 明寛 ちる川なるすはありとのゆきえ あんし流し

とのゐ
万代恋五 源兼澄
よそながらみる人世の中にと思ひしとのゐしかい

とせ川 枕名寄 為家
とせ川にちかつきて

尚歯會序 とせにちかつきて

とみの川 諸持
菜苑 とみ川苑
とみの川二葉の流れも唐にかしあふひやうみのえらし流れけむ

後拾雑五同
後撰恋二 よみ人しらず
あしひきの山にかゝりてとふ鳥のとをきをも恋ひつゝ待たれけるかも
六帖 やよひ
うみつ代のいさゝにたへるとふ鳥の流れもかぶみてはたえ

○契冲六帖著見合し

とみさくら
堀百 仲実
西にあ南のかみなみふる嵐のとゞめがたきにあらぬ春の事
新六 信実
らきもなきては 流さとさんまえ流れの種もあり川かし

○蔭くは 四廿六 とたえたるにゆるのもえあへすて ○同三

廿四 とらまつ流るすゝも人なきとしや○同三 卅九 とみ

んにゆきゝなふ○源 隠岐 こゝろんなとさきなふ○同下 若菜
こゝろんな稀んしやうえなふ○栄花 楚王 夏
○同 そへの

こゝろちんつき
風葉 夏 あつきの日さきれ雷鳴にゆえ侍りける 花のふえの 中納言
金物てもこゝそみやいえんこゝろつよきのゝみ山にかはまし物を
○四季物語 四月 あふむいこゝろを葉しそいうに似ん二葉
のあふひあつてこゝその里かいかはきまし よたみあれ山と いう賀茂祭 ○

六言

こめらしうみ
万代巻一 七月廿四日くにまろせける 延喜御製
天つほしまちつる秋の夕ぐれは待らしうみもせしもなかりけり
○

こめかゝりゑ
赤染集三 廿四ウ ○源 絵合
物語ゑかきそへつえて○

こめさとし
源 若菜 ほのやけき海にものきこしめく○栄花 花山 卅九

あやしきさそしれらしえて〇挟衣二下 廿八 梅の
さうしあるを抱とらせ見えて〇栄花 浅悔大将 そのさと
しれとくその由免さるかしこ〇

七言

そはのたそやみえ
堀百

〇袖中一引万葉抄 作者之 云そはの草ふきといひた
しくの人みちいはつまへりるいそはとをるい郭公のふりてたとと
まてなりるりえ出さりりる時にほとときはのふるほとにゝ

そはのたやみくといふ事をしてたる川の草みくきにつき
なる也しそしいうへる物そをそうてさして時分のなみにそ
そかくるを百舌鳥の草くきとそといひける〇

そらきのうろみ
保憲女集 詞 うけもらかえぬそらきのうろみなして〇浜
查西大将ゑさにさあてうれ物そてそらきうろみうきせ年
みなひてならなしいえひなふ
堀後百 後朽

〇濱無名 たかなえのいえきしてそはなくをさえいりく

モトアラノ桜
ーーー里
ーーー楓
ーーー桂
ーーー落
ーーー山吹
ーーー小萩

もとあらの萩

都土産 もとあらの里と云所に有けれとも ほかにはあらぬ
ためしを一株のこして
宮城野の萩の名ある所 もとあらの里は有しかあきの初比
と思ひつけ侍りし此所は色ありし人まつりけるを見いされ行
のう宮み給ひて 草堂一宇有り外はことえは此花をもい
みしへいちきやく人のたえしみけんと 哀ましに思ひやりき侍
つきくそれ もとあらの萩とは春宮殿ましくる去年のふ
るえに咲るをいふとしきかき侍る ほきを本萩とも
いへり 是は枝さしわかれともなくての萩なるもさかしくしあれ
らかるめでもとあらの桜なとも よそて侍ると思ひさい
しにつまきつ侍るもいとし此里の名にもよりしも定なくみりし
と思ひ給えて 思ひあはせつるも侍り

新六 つ 信実
蓼かるしめしむまく神山のもとあらのうつかれかもなし

曽丹集
あきのよのもとあらの桜さかりなる も人をとらけてこれはなの陰

同 夫木廿二
あきのやりよのをきもおそきかりもとあらに咲ん花をこそ見め

清輔集
あさちふのもとあらの萩の花咲て色こき露の袖ぬれにけり 見るる人

○後拾 秋上 長能 もとあらのこき○千秋上 後京極 も

とこの山秋 ○新六 庭桜 信実 とこの山のさくら

古今
高嶋のとこの山の小萩原をかしみ

夫木六 後九条内大臣
山吹のとこの山の花そ咲にける 杉間遠き萩のまかきに

同十一 資季
旅人の身にしむ夜の秋風にとこの山の露 西さそはれて

同十五 建保二年内大臣家百首 家長
秋てみるとこの山のかくてとゝまるを尋ぬもあまたにかさなる

同 為家
植そめしあきうきの露まくかれかれて のきはかろき花かれ

久安百首 清輔

○宗祇旅日記 とこの山の桜

とこ川ともかし

ナラノハカシハ
ノキハノシキミ
イナリノスキ
ノキハノカナ

後拾遺 好忠
さかきとる卯月になれは神山のならのはかしはもとつはもなし

壬二集中
雪つもる嶺の山寺うちたえてのきはのしきみとふいもなし

新六 きりきり 光俊
きりきりやりふえら縄のなしそていなりの杉はとしくても成し

新勅 秋上 家隆
草はら上の露とりなきの玉つさに軒端のかちはとふともなし

○

とのけかまそる

菜花 花山 十九
モノウケタテハル世ヲ略セリ

そのいもせとそ

花の宴巻下　はかいそのいもせなそのさへ人にかくせと　ツゲロセヌナ云

あへなくもかくしてん○

そのかゝり不

菜花 ええてぬ菱　人やはきそのかゝり不ぬい○

九言

そのにあまりはてふ

濵菱　そのうちの人そのみそあまりはてふ○菜花 ええてぬ由先

卅　そのうちの人そのほとあまる○同 浦々別　あさはし

うらもえてそのみそあまりせなふ○濵 なけろふ　さふもい

なふ人そいまり地にあまりてれん はとひなそていふ○菜花

峯月　衣またいそしうわほし はとひ地にあまり○同 林彦

十二○同 ゑ川花 十二ウ ○今昔廿二 八 物ニ當リ喜ヒ給

フ○同卅一　平仲物ニ當リ出會テ其返事ナ身、

キ取テ見ケレい

十一言

佛神のしるしほし

華苑 五 苑正 さるべき佛神の 清ことに 深みや